
第98回日本語学会 大会本学開催記

伊藤 克敏

日本語学会大会は年に2度あり、春は関東、秋は関西で開催されているのであるが、昨年3月に現会長の小泉保氏より電話があり、ずっと東京で開いて来たので、98回大会は横浜で開き度いと思うが、筆者を運営委員長として神奈川大学で開けるよう取計らって貰えないだろうか、との申出があり、早速、学長に相談したところ、意義ある学会なので大いに賛成するとの返事を戴いた。講演については会長と相談の結果、昨年度は「社会言語学の理論と方法」というテーマでシンポジウムが行われたので、今年度は「心理言語学の諸問題」というテーマで、入谷敏男氏（東海大）、大津由紀雄氏（慶応大）と筆者の3人でリレー式公開講演会を開くことになった。入谷氏には談話分析について、また、大津氏には生成文法の立場より、文理解の心理言語学的過程について、更に、筆者は発達心理言語学研究の問題点を各々論ずる

ことにした。最近、社会言語学や心理言語学への関心が高まっており、予定よりかなり多くの聴講者があり、10号館42教室は殆ど満席となった。研究発表の方も普通2会場で行われるのであるが、発表者の数が予想を上まわり、3会場で行われ、本学の古岩井嘉蓉子助教授も「HallidayのFunctional Grammarのテキスト分析への応用」と題する研究発表を行い、好評であった。

日本語学会は昨年50周年を迎え、今回は後半世紀へ突入の年である。3年毎に開かれる国際言語学会議に代表を送っており、第13回会議が東京で開催され、海外からの3百名以上を含む1300余名の参加者があり、日本語学会が中心になって盛大に行われた。元会長の服部四郎氏は1983年文化勲章を受賞している。今回の大会は予想以上の参加者を得、大役を無事果すことができたのも、開会の挨拶を戴いた学長、初日の総合司会の労を取って下さった深沢俊昭助教授等同僚の方々の御協力の賜とここに深謝の意を表し度い。